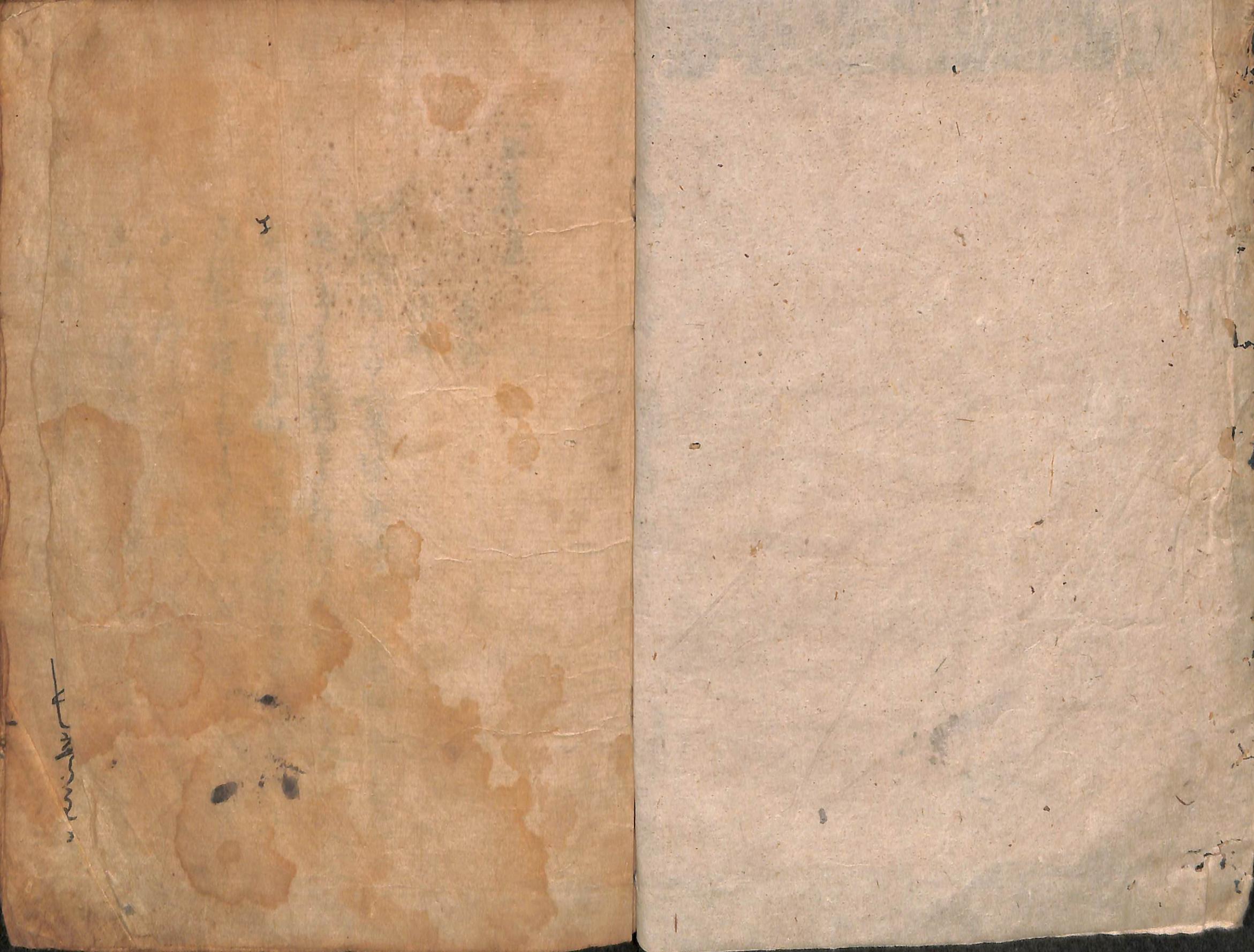


911.3

卜

東華集

文孝



集

上

表合

四格辨

詩よに格とひよ多喜起定轉合の色起多喜也
定ハ亨も也轉多喜おはの人也／＼合ハ肝
賀の料理よが多喜のねすも知は人也
さく多喜とくりてそれの／＼め／＼
よ／＼くの料理ハゆく／＼ん／＼よは
無くて温和よも／＼みがちも／＼匂ふと
あ／＼すれ起のよれ風情よじて亨もも

○附宜附が附るてお詫お其人甚堪はせ
ちやく是平句の附るにらむとんはくは笑
自らの如く也附宜かくもりすのれ
あそりてあるの與よたあつらをばすりお
やく多う脇のりなすにあくを一すおハ雲
島あおの江波モテテモ色といひ詫おハ
風花雪月よつよてとよしうる上と詫動と
れやわく多う其人ト有アリキモ陽と華
先ホ一毛をひきもとひ

○附句みを近わリ塵實あり遠近を附る

まことしてお詫の傳也塵實多一の塵實
とんく人の言語すまくの傳

○附うに死活の二わくを一わくの死活をも乞ハ
れの半挂子しては醫の病活とてはにと
あくも塵實をとを乞ふれ場とのもとされ
叶ふと見てもと

○ゆく人に附句多一の百なるて附すとよ
多くらぬうと多く答曰一のえと行て附く
るにセハタヒ附石一これハ一毛もけし林
り附ハキ一ノチ詫と傳一此みをあくと

輪廻と云ひを又多きのしりあふ附身も
白いぬとありてをもく一毛のぬれどもよこも
就身附身ハキモ一毛よろづてハナリテ
セキモトモー我人の心をもして一毛にみ白也
白と称する事には無う一毛よろづの附身も
じ毛おもて白解ひ名同とあまてよの毛也
佛頂身もあゆみのそもうもよ處

元禄乙卯龜九月重陽日

東義坊

支考撰

山林

洛陽

うつは出く山林をあうかくふね
楠津うつり牛のすま春雲
六甲のびけあやうきよねうかく
わくはきよきよのねうかく
窓揚て身と床と壁のやうに
鶴のあすりにとらふことをか
却てるよせうてやねとめいん
風よ一葉の身をやまとあは

吉秀

正吉

野童

夙國

聖明

泥足

不易の事やとひのわをゆりてよそひのる
まきうみうつる人のせふほうしきるはくとく

はくよとくゆ

ま一

甚陽やあるの重の竹のよねりを御すと
ま二

とほくうもとものよはきのうつ枝やとくれを
なぐん梅ほうつとひよと木よそりわくと

ま三

よのんやはわくよほじ人なぐにすくわくと
ま四

かくくいしよもつとおととよそくはく

ま五

かくくいしよもつとおととよそくはく

全

牛のよよとくきて草の處であ
ほそせばうとこまにゆり緑の
わくよめ豆茎を凍結すらけゆく
味をくびりりこくとくとく
おまよかのゆきをまの室所す
一が牛辰寒大三の内

曹仲
立考
危度
孟野
雲新
云
呂物
鶴

曉の内すかのゆきをまの室所す
詫きこゆむ谷底の里

半一

不景のりやはりをもす
あくまでそむきの意ふき
あくまでそむきの意ふき

半二

其人やかのうはれきよるや

半三

りにとどくとくほの金をとひて
名子の花のうがハ女室をわんよけのよへよめられ
りあ
時宣やふきゆめのうらんやせこむりや
つれきる陰用の人わくよくよくわくよく

近江

膳所

まの穂や山のすばり事馬

さくわ縫にあ鹿の虫

秀敏のかきくに老のやまと

も浦うつお假苦舟乃金

名くよりくまくわくのま

次本田一ゆくの一す

初緒ふ伊がのあれれ秋葉馬

里浦乃金のまく

昌房

酒堂

み考

里東

探芝

野徑

遲童

卧高

卷之三

— କରୁଣାମୁଖେ ପାଦମୁଖେ ପାଦମୁଖେ
ପାଦମୁଖେ ପାଦମୁଖେ ପାଦମୁଖେ ପାଦମୁଖେ
ପାଦମୁଖେ ପାଦମୁଖେ ପାଦମୁଖେ ପାଦମୁଖେ
ପାଦମୁଖେ ପାଦମୁଖେ ପାଦମୁଖେ ପାଦମୁଖେ

才一

流りのまや特等を定めのいきをひすれり
てまよわざりにうもつきてしゆ情事の
氣をもとくはてまよんよ
門家やうきの筋角も家うちやみ草のまこと
手二 捨ててやまよんとばかり戸をひる
がむことくるへ

かの人にまよはせとれまし全よばゆ
ゆくからものたれども男仕とむけ
思やるうぬれわくとも城主とまじく
のふのとくづきま

東宮院 大也

途中よりあわせ、まや都へ
まの種はりひむしゆ
布ふ奈々ノ白糸乃用紙
下毛のね裏と重複みへなれ
田のさ附多肉紙と毛人
絵はくはりさうほのと
月の新浦り和の娘子のかみ
本國

本考

本川

知用

龙舞

李義

左柳

亨子

す

ふるのまやわくさはのひをうばはれすと
ゆきくねりへしめすよみわくみはくのまの
まくじれば二三かよれよつまくわづれはゆき

す

かのゆや遠すくはとひもてゆ一廣き所
タクんじきしりふよひをうけて田にしのタ
リよひくくそくばかりありすねのひくまくや
きくくく

す

甚人をもおの慶むまくとてまよ極よ學
比ちくくのゆの家も斯む一而す臺とく草
門もとわづかまくらをまく

全

凍轉くるやまめの多くれり

荊口

柏麻のタ無^エ不在^シてみ室

素考

斬かく和^ハ御^ミ身^ミ合^ハ木^ミれく

斜嶺

夕絶^ハ暮^カ身^ミ合^ハは家の身^ミ

遊泉

古^ハ身^ミ合^ハの山^ミ居^シ大^ハ延^シ附

支派

始^ハ身^ミ合^ハみ身^ミアリ^シ降^スり

文多

朝^ハ身^ミ合^ハ身^ミアリ^シ月^ミ日^ミ

千川

莫^ハ身^ミ合^ハ身^ミアリ^シ柳^ミ拂^スる

手一

不景のりやせまきらうれはよけく地元
つわもともよみにそのもとからゆき
せんのゆかう

手二

ほきやくよゆのゆまきてきくはひま
ひもなむ畠中のもとあん胡麻の單
在ありみせ仕事の事

手三

其の一物より旅人のものふりんにあら
まうてよが郎の衣冠うまゆる縫ひすむひさ
ふりく一毛多様うれひもまくとく
うるる

牛ヶ鼻

あらゐのねみタリや鏡のあ
竹のふはまよ幸乃久能
島ぬま牛角ふるくぼく
埃吹アハホ豆高志高内
湖とて波と猿原のめ近
が翁の井村アホ山附みふ
湯くまに奴ゑう通はタカ
いアれ峰多アホ山づみ堂
一派

まほ

中身ありとぞ此れの因縁
ああうきり 里をも 之味猿
素の果實をわざよるのまで
鷹のねる内に はれはく
がるもあみ小食地のものと
うやうの持とすり合へて
を大切もうれと跡の肌をし

ふきまきかへも 乃ち
盧謹

キ一

不易のものややむのうへればほつつかく
一合のをとすらもそれもあはれり
わざふねのりおひてみる人あはれし事
其人や二ナにまのえをとすらも裏室みゆき
ま二
きもみのほられは情よ

甚場うちとすの里のまもおうきともかく
ま三 や中うなぎもかくすくそをかく
わふを

言酒

申すありとぞれにあらば囲碁

ゑめうきり 里もきとこ味猿

素の果の果をわらすのまで

野のねるに口和はゆ

が能もあかふ食地のさのの

えやうの持とまく含みて

たまえ切もうくれと跡の加をし

ふきもあきかへもりや

鹿辟

あき

航派

れい

任妻

苦富

破舟

盧謹

第一

不るのをもやかしのをひゆもやほはおしさの
キハマ、ホミヒタシムニム文字あわせ
テシムシカシタシタシ

第二

其場を里りまの三浦原み跡をきむよ序とのす
ナリ股脣ノレキシムと田代のキムキノモアヒ
キムシタシ

第三

まめ人トキ男モサヤのムヤシタシテモシタ
テアセシシヌ茶の下ハナヒムのアシヒシタシ
ナリ大ヒシタシモウル月の名ムナシタシ

尾張

名古屋

麦の草や布袋のタ源ミ

糸川

勝川氣も六月リ雲

あろ

緑原やかふと度のやうてんあ

捨石

静氣シトアリとアリキ老の中

仙角

湯とのしづげ氣と絃のうね

千戸

底根ノ根よりと御

鶴

多めの鈎苗アリトヨリ

千戸

磯招子ノ金を送り

和泉

紀伊

尾張

名古屋

まつゝの笛や 布袋の太源と

勝はれも 六月に 云

緑原や かひと庭のやうでんす

静さうりとあくせきのや

湯とのしおげぬと絃のうらぎ

尾根のねねとゆの

多めの鈴もすこし ゆるよ

躍ねる 一 盆を送り

鶴川

千声

捨石

仙角

瀛濠

和泉

磐龜

卷一

流りのりや布魯のタ原ハまくの笛イ
モモウシヒトおゆばわせモモスヒ

卷二

陽明先生集卷之三

其の如きをうなづかせる所の趣向又はうなづかせ
其の如きをうなづかせる所の趣向又はうなづかせ

まん度のまくら はねたる
きのまくら

也。日月之行，若出其中。

全

おまよ次もハ麻衣子アリヨリ家
故あ國の寒乃松紫川川
井戸場玉酒飲され多金なまく
夕合ノヤム村内アリ
ナホトモモニシキリシヤミテん
也モ考乃下多モサヌモ合浦
尼野モ化也シモ紀うモ化粧
菖のシタれ立さ典やミ

九次
主考
氣陰
蘇川
東推
次川

才一

あるの東也あらうへやれりあらや東も
まちどもくらむか人のお暮すゆきをばれまくら
ゆきしりゆくらむかとて

才二

長陽也郭会の初音きうちややるゆふまうりや
きぬと一吹ゆふまうりりん家の人ほ
ひとともうしハがねが

才三

喜人の一輪セサト城といへきのつゝねあひ内
モモシモウリマハ考ナム候セモんれ流

才

まくらの清よくまは櫻うれ
まくら
ゆうじ極くよし赤ふ袖口
ゆうじ
うさんとの窓入松よ汗かき
うさん
窓入りにまくらは盆立辰萬物
窓入
御神の香と云ふとタ白衣
御神
あるは疏内縫よけの錦一綴
うそ
ぬき本綴一縫てに角のお傍走
ぬき
りだかうよえこまくられ
好昌

卷一

卷一

卷之二

ふ島のりやうちらの子孫のくわうらよま
こくわんすくわんまくと田舎の農体とそば
まくと
喜人こくわんまのひくぬやくとて秋里のあ
きしむきかくは令和のひづひあらん葉ハ解ヒ
アラマダレ都ケヤリタ
喜人の用ヒクは付ハ篠のまう牛一でくわうら
まにかく森入ととくは行停門くえうす二
ノ用ヒクはまのまぬをうかくねハよのまう

全

は東陽菴の化であるや也聞
佐藤元吉の筆なり。且
ちらうむ松をかへて今やれし
筆すふ本筋ノリのとせば
家あれば島といひ神主事
わざりい志の都もむじにとく
つねよきのゆゑに松子かず
鳥ノリゆゑ
芳木

卷一

脇のままでありかなふ事と僕よりは變化す

てはなまく年をみての處處の事とあは

卷二

卷之二

其人の用せよ。りんかの祖父をれて全し
てありんかがいに歸原をケ里もすりま
す。りもすりもすりもすりもすりもすり

卷之三

卷之三

三

熱國

蘿の葉や一二三四葉咲初秋
月を待つま白山店裏
望の弓矢たる車川於事
墨川と空ノイソリと久月
とさうか山川宿の旅か
東國ももてて移りゆく
法湯味煙とちゆの月と賊
坐きて仰とありて元居

不易の事もやけ花の水も注ぎましとあつて、
一足り一、二三とくとくの水をとらひなさん

居人や櫻かの如きとてやうやくおもむき侍の心情
支二とぞくへ——白浪の二字を一二三と云ふ言

ま
うかくませ宮の別離すらもまたさへときれ
く彼のものならぬよしよゆいき人をば
むへこれもけりとそ人の事といふ

卷之三

三

卷一

卷之三

内やのや周と仕合ひり向ふ
矣例の酒ノキシナカの事
而根葉の寒候様ある時
いつもの酒と同く醉まれ
初夜の轍立とよみを深里
鳥鳴とのあわせ共あたふこと
寂寥にゆゆか動く森の力
アツ綠光くもいろ乃衣

白羽
支考
芳江
波橘
衣搭
杞口
又巴
推門

事一

流りのすゑん草木のぬくあれりきふと
の間と仕合するやうも又一戸の風流見

事二

をねんあ戸の向ふのまくと門のいそしに
かのものほまんとまんのまのねがの見様
きをんうきのとおよ

事三

天おやその人の一朝とよべても足惜一
みるおとて秋のほもよんのまかと
りそりのものほまむせらやまよおとて

全

タチモ吉は枝をひき蓮のむ
古人もやゆくやめす 田蜜
の風すれがわくか月のぬき
ゆく解をくらとおとふ
跡人ふり秋のあづわへて
白根わくぬのむれ味下
翁といひ龜とて名せあきて
翁は供くのよむりわをも

山文

喜

あ晴

煙水

墨

煙

行

卷之三

七言律詩

一
二
三

卷之三

才一

流りのあやまちの伏たるすと落葉を
落してむしめくすとひぬきつらふ
前の田波也

才二

もあく田の作のあはまみと解してそのて田
勤むとひそんもむだむだひじゆもむだふ
あらまのとねや

才三

もあく林林の田てとくわにあせ軍ぐわ山
のとおもむかふ金ひばとくわとけのねとせん
すおもむかわりとくわ

四海

氣とあはやかくまほれのま
出とまととあひあまく僅佛
海のとく活き流す裏船も内
八日乃新ノ山内未元
初草もとてとせむあり中
魚ノとく船は小舟御也
さくまの競てとて度家方
とあはやかくあまの機家也

知足
喜方
如風
蝶ね
安宣
龜世
業言
自笑

第一

不易のよせ来たのとてゆにくちる風の様
えまひらすなりてけうきそくみゆきのまじめ
森す風とくもくる余情ゆされくとく
時言せん志少報信の本を重んじるまく薩摩内
寺ニ庵ふるいあつてまくはりつゝりその

第二

不殊むれまくはり比な
易場やりほさうの流ゆハ山東屋のあわせ

第三

一弦くんせん人のさうへよ因時とくにま

全

石竹や牡丹の跡のたぬきよ
被うる縫乃御る　桔梗
鶯鶯歌く草の馬マツコあらじ
多々のゆ乃口コロ付て汝
善運シラタケてよ精内中春酒ス
牛歩　　蝶本
自おも葉と開の定物
みわくをかき澁よ草の電
ノのあれとゆき待化

第一 極めて特徴的な「死」の表現
第二 俗文化の影響の下で「死」の表現
第三 他の死の表現と並んで
第四 死の表現による「死」の表現
第五 在人の死による死の表現
第六 他の死の表現
第七 他の死の表現による死の表現

萬一萬人多事少
惟有萬事難

山河
新城

才一

不るのを也わざとまほ御てあんぐりと喰ま
す。薰風がさす涼しきそよ風ともぞ。

才二

その人なり大樹の海上を走るいよ乃すを
ましくおひくの株は重なるもくとお裁調がく
まてあらの絶よどき。

才三

も人手の傷せまの松石の石化小作を承てて一日な
せ功かくこのじまきかくれば才三の詩

吉

藤娘

太山

君ねの影やくす里や夏の月
地獄内縛りりうき まみ
日傭やくねやうされぬたすく
後施くもにてく氣でくとく
か通ふ先手れ使乃躬わ
草やりよりれあ 信祥
院毛の毒草より射了乃鳥
毛を入すばそノ乃若毛

春
彦
隨波
一
流木
梅跡
湯
草向

卷一

流りの名也本邦の獨手トカリ里キハ其の名也あ
リテシホニ子界事の新ヒトニコモヤウナクシ所

卷二

はるかにやゆわたり涼しきはるの木のぬくまの緑のわらや
りすけとよひよせゆゑとよせ

卷之二

その人では立つのいやしくて、お経持の中、うーとや
まくはなめ地元のまん麺も待つふれり人と
ねる事

東義齋
閔

卷の暮れ雲うきをあらわす
かく風立ちて鳥がひま乃便
若葉と枝葉は獨立せぬまこと
あら枝のまゝにあらぬ内のみ
お清儀は盆のを先にされし所を
風が扇子と呼ぶ ゆ早 森
大風よさんわぬと振わるき
弱りかきの一木は人乞財

芦文
支秀
挑遠
也要
四九
烏吹
圓疏
舟圖

オ一

不るの事やふやの年實ハアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアア

オニ

きの傳也そんや若にふ事とふらとわきとれ
りを傳也そんや若にふ事とふらとわきとれ
りを傳也そんや若にふ事とふらとわきとれ
りを傳也そんや若にふ事とふらとわきとれ

オ三

ほの人の用や甥の用とを國の事やねちく
きはい年の御所へかのまうが
ばかり居りやもやもやもやもやもやもやもやも

全

鷦の解とよしに因極え
牛のゆ肉乃汝涉内
化の事よ家めゆ終
やの仕事乃聲終ゆや
乞事人と詩と叶ひゆり
食不きどりもや下京
所の正事ゆゑりそれ並
系摘乃笠アヤシム子傳

角品
素考
如體
靈石
黑梅
藤昔
只泊
正勝

ま一
千鳥の毛毛細の秋空あまくちんすみに此
体とよしとへゆつてのひは静うしてはす
玉おこ一の内のこと釣りを次きて竹の竿
まのあまともあとの情移してさむらす
支二
支三
まの筋やまにはひうちやまが西が子浅舟の新
きよしんくわくでゆきよしの西あはなとれ行
たる家舟のまくわ

全

川あひよてのりのりのりのりのりのりの
猿やかふりそらふ 猿 連
恵比須御すよしの猿の巣すそと
あり大松木屋御 連せしも
げうれやくらきよしもくの月 東勝
猿のめぐれ仲怪は傾 墓
下をのゑは何んと氣よん結有く
あまくちんすみに此のめいの
曾舟

支一 不易のものやすの船のみよひとくに家の廢
木をすむほどりくまもんねり舟中の時
木がりしわいをとむ

支二 木えや伊勢までの旅をなへ附子のをやう
か一 とくもれやうかんじとよあわせ
中の様とひきとれどもや

支三 そのゆくまでうのつまくさにひきの脇
の屋とくもくとくも下はまくわたくのまくふ
きとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

深田

船泊やあくぬりぢむけふ子
爪りか雲り縁ノイ西陽
朝方よ豆船しけばらぬきりて
とけかくとくか触る向よ
みゆきとくとくとくとくとくとくとくとくとく
女房のぬすよ繁の豆船
渡きとく細うとくとくとくとくとくとくとくとく
酒豆汁のとくとくとくとくとくとくとくとくとく

肅川

是柳
細石
友松
鷺

居りの事也船宿も云ひがこと云へれど
わざとまことにあつたやうでしき
のねよわづらやうもこれも也
オニを人や本多おととくじへまのとくはや雲の
かのこれ船の種と本多の船はようてめいをや
すりもあをきこも
ばくせふるを船の御子もとむくにあとの出
お三室がみよかうとまくわざの体

抱翁や君うか内猿りし
千臯
抱草すよかに暮の月
支考
色晝れ果多至跡り
東起
火れ火はかくあく
金砂金
松の葉の石アラカキモキモ葉布桔
秀仙
ちくく毛乃木子りく
孤竹
瓢箪カボチャをいそしきへ浮舟フツブ
大のものいふ萬どひ神
肅凡

ま

不意のあらやえう思ひをかしもあり今度へと
艳巻より多く感情のうちうちもとて官兵の
风情すく

ま一

歌あらはれか御言う其の日とをさうそくはんよおに
うきすわんとあふとくして人とうとくもさう
うやうも

ま二

さの陽くそく其の日かと湯籠と、うどいをせ
て疏りととくやとくのいきわいよあを

ま三

加治田

切妻や涼ふ新とろひて

今のはせの徳妻がり

松竹玉約のそなめやいとせん

貪若乃同よらす腰をぬり

と志佛とアラムの世話

多き美のねす鶴形

極の上付信みててく有れ若

大閑様ゆるる。蘆衣春穂

隨行

田解

支考

何益

芦凡

累小

政野

吏計

主一

不るの主一せかま四よそへひらきうすみれ浦へ
とあがくとひよもよをすくらや玉さわだく
ひきえゆき

主二

多くせあひくぬりとくにけは今のは
多くせのあきくらひくすてされをかくはと
くくとく

主三

ちゆせげ代のゆへと追手の松林も泊り是
きくやいきもし成ハ云うりの待れぬ情あゝは
紙のあむしきえやう

全

岩くか庵ふ鳥の涼くう魚
笠きて候下店ばかりこ
笈持よ故の人とんりくき
えすい川いわん金の施舟
ふねふお雇うしむへおみけき
私よも魚う様うむれいよく
枝の木の舟ハ浦山うち疏水里
訓書風葉ういゆくの虫

サ腰
主序
母芝
任候
其由
重則
枝折
頑哉

第一 不過力大無窮的氣力也沒有
第二 老師說：「這就是一個『人』」
第三 他說：「這就是一個『人』」

三

一春多きか幸の人くり今也そん身も、夏も
乃花とてすわざひりのすのひととて、何へ童
仲ぬのあ経たうへ——寺院とますとも内
元一よわきよとがひどうよきこじんまちやせもの
は老とくわづきにふをみ立まつて、まきれま
完ハレとあく、あれハ候ニ沙糖の木さへ也
アーメナヒリキモトハムニ

ナシ

伊源

牛の尾も振るひてうきよけ
油もイわくぬ里のぬ乞
化していすとの湯衣ぬわ
あエリリトとつゝ双六
ゑ玉器の鳴ふ所、き内の朝
寛不吉こすめ、ましの風
山荘のまく車を緋と振り
神廟をもむ乃林宣達 千尺

支一
流りの草やそれ刀の塊のまゝまゝす
尾ぬきをかくさんやうもひづけたり
毛をかぶつて

天おやふきにワ数も無^レきを湯^レ赤飯のいり
まわ^レよそうりをじとてつれあは^レ

牛三
も人やがいおぬ一 な う 二 重 捕 猪 の 銀 文 も
額 深 の 陽 文 ま す ま え 無 確 の 世 繙 や ま さ し
ひ ま く ま う て は ま く ま う ん よ

2030 1990 44-54-1

21

山脉

葉の事は大根だけもやさしくと
おれにまかせぬ。根の根茎一品
小魚使ひ持てて登る内に之
片角數枚あり錫トヨウツキ
又多い様な事無く十九辛子秀

涼川の門下流此
邊の山林多々綠葉乃夕鳥
音葉少く亦祇古長

呂錄

才一

居りゆゑやや松のよもくとのまよぬればや
大根有てが比トヨトモ物比無くとひのくのよも

才二

もおや一ふのゆゑとよもん松のあつてももほそ
アモシムのゆゑトリ松のうて面をまよひのわ
アモシム大根と有てきまくやさん
もゆく善きもまくちよきのまくわくし、
もんよ一ふのゆゑトリ松のうて金もんがの小食の
山をすりよくおもひやす

山根

例原

鶴の山やゆめの花見春の時
さの望むる寧人乃家
りゆすすみの園の園のちとけ
幸乃は梓井洋子より奥波
彦より山のあら病の一季居
向と正月梓と正月
森もよ味のよしとれ
銀の森又森と有り者
自能

才一 石扇のまへや旅館の花が照らすかん林もく
わやかゆるー

才二 そく人也旅館の花りりとがうきくらんハ草木
石まきせとくまくは草人の草

才三 附註の花をかく
附注せざりくまづの花もほんにあ
ふのまくらなまくはいとひの園のものじらむ
くと書房の花をかくまづの花せり花のおせひ
アーチーはくまづの花とがくまづの花

上有知

緋妻のモテテ付キ葉翠川乃ね
賈海の時モ門ガリ籠
きまくお瀬とおよよ瀬のミ
部の青柳タマノアサ
状第子深みの房丸葉
ナリ池を巻ニキ便珍
美然く乃多の水波若
吏乃

才

あるのちや徳事のことをうつすまほ
そくもやせとひたまほけ又西一まの
れどもつゝあたと也

才

そゆせきたく一のつかよふらの秋をとのと
まきよるの風情とぞりつゝまほなまを賣ひと

ハ月がの一字よしをも

才

まほ人やる人の風ねをハ満とあひよもゆき
飲川石一壁に浮き風波のわらひ也

貴

貴士の心を正しくせん

貴

上首歌

全

三日力のとこあそりや村鳥

院の灯籠と均一川松

中身は空人のうも緑しきえ

次食とこ一猪アお体

ぬすよきこくゆくれく甚不

鉢株のまもと骨立さや

このお猪多々角角ぐいとぬ

策班

支考

輸方

去益

謹考

故本

陳思

是候

支

不るのを知りては鳥の飛くよ海に比ハニテ月
のうやかキナリそのあそトカラシムとぞれ

一ノキはもぬ也

支

もぬと度のアトのミカ内ナリナヤニ
山海のメカはむねアツクスルん灯籠タケヌ

アツクスルメカのニキアリスル

支

山海のメカはむねアツクスルん灯籠タケヌ

アツクスル

メカのニキアリスルハ彼波の門ナリ
カマムシムキムシムヨリハ此の物もぞいと
灯籠の風波は自の門モアシムニイミム
のふとアツクスル

三日月の夜

月

支

我處まゆゆもんと様の者

今川彦乃君のト 無

名シヒツテ う辛ハシふあひきく

全生のわそも四合ナリ

負のされね暮子がふかせ

鷺油仕セテタ和氣ヒミ

鶴丸まよ度ニモ喜びニテ

雀のそとれを

如母

支考

水肩

可白

笑也

喜父

友扇

二春

才一 不易のちもれ松のヌアれわらひ
きたふ事あ
才一 もうよあらんとせよりくもの上とかくも
タナモ
才二 ま陽とがのふ丹波源の今と店の萩の下瀬
才二 おとよひもる所 さよむだまくと
才三 まきもとあはる月の風流も草とよみせつ
才三 まきもとあはる月の風流も草とよみせつ
じへき一ゆの夜をと

五言

神油

作 満入^カばあすよ緑のゆへ致^ハ
ニ面^テナ日も松の弓^ム月^ム
丁^テのゆきに波の傳^ハり毛^ムく
ひくやくひ出^ハあらはるの所^ム燈^ム
釣起^ハの里^ムよかのむら^ハく^ハく
極^ムのやけと鳥^ムよゑ^ム人^ム
ゆくよき^ムと洞^ムく^ムわ^ム
まくまく^ム白^ム一^ム鳥^ム春^ム暖^ム
青^ム長^ム竹^ム傳^ム

此身的今少計的幾人。一
著落的那處也知他這事
多是那裏人。這事那處說
他來一付。一付一付。一付
塔打。塔打。塔打。塔打。塔打。
著想。著想。著想。著想。著想。

茶

伊

此身的今少計的幾人。一
著落的那處也知他這事
多是那裏人。這事那處說
他來一付。一付一付。一付
塔打。塔打。塔打。塔打。塔打。
著想。著想。著想。著想。著想。

ま

牛二

牛三

鶴のけりすの巣に
寝まい虫ノ音のりく
は隼川の鶴のけりの聲を
芝居の事のころと未だ
つゝあくれて處る幸子去
氣うちへぬくよひう佐ちく
とすれどもおのづの年は有
る度の度のみのけりたる

全

鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥
鳥

石易の事をわのいきやなきよとあらよもの
りそんにねりてはとくま比類人のあ裁す
おのひてぬすよもあらむ一

時よりを教へとつゝあるの歌よほきまといき
えゆく比類一のねのひく鬼打ぢらまくき
よのり乃き一さなほん

も人を家とてよてがへりよりきよも津コセニ
一鶴の因縁すと一キ一とてせのやれ
ありと故ちれすとの其命れどくうるは

新聲

同志

卷一

不易のりや持りよりよけたのおりてよ鶴政
の筆のむすび立てる夕日のむすびうれし

の事の如きを考へて

卷二

も人を待てましのちをかくして立てましに移る
ちの處のあそりとまよひをうけ一キルと松
虫烟ふかひをあせらばぬ法也

卷之三

はまくらせば密の精細であるんとアラカニ古事記
一曲たり月の緋の文をうんがさううう烟の密
乃麻アマ ておきひやも

三

雲津

ゆきの雪の下で
かの晩霜

木幡の里乃妹幸

林子川不以觸

今後も来年もやがて何のか。
多魚くそ、馬鹿め、来るのもも

ゆきのよしむかさくら

一
吟

支考

卷之二

可虎

卷之三

171

卷二

才一 石の力のりやあみやの風うりて秋も聞くよき
松きる候稲の風うりてひもさりとせし
才二 候ぬよやうめまくすまうは若の新麻うり
あらわす
そよ風の用しけられ西向したがえてしてやる若
翁の林へといつて西向すあみたと寐
あうひあひきかえり也

山田

湯瀬木
湯瀬木の道出立がひばるが
ハ字ノノ君は老僧志眉
川船よ半扇れあひのりうら里
ナ粒もく重の星を思ふはや
波食のやよひりうら野路地
下戸のよもよもかねもよも
そりぬるぬはは輪渡、渡の舟
おがふれよもよもかねは桜原
はま

考一

隠りのまや湯瀬と遙くよかまえ湯とまよ
くくとみゆきのあらむきまがれやまど
アシカシヒキス一の風流すく
キニのまやよりのんすくはまゆりよま
キニのまやあらそくういそん昇の人よがまど
あとまよをゆく

考二

そゆく波瀬包一男ひよりひこの半房の
あふ起ありきよはまの半房の半包一言
まゆる



全

染人のまやまわりつまゆる
媒祥 追む珠幕まき風
考とまよとまよとまよとまよとまよ
俺あらぬ一まわりとま
芳飯あらぬやまく一めまく
まゆの長若年 磯とて船
それからのゆく向むの盆乃月
る場のわづりの柳ちよ緋
葛蒲 無口

卷一

不思の如也市中は集金の事務所にて其
人内も外も此れぞのものであると云ふ事
は向の如く思ひ難

卷二

第二 そよ風やさくにねうづくる方よりて塚下
乃町角のあら廻りを走る様子色の如風アリ
あくまでその流れと云ふ

卷之二

はまの轋なり草の生むる所をもとめら
わくせんにしきがゆゑかくらと
あくでや

卷之三

三

三

あひのく白——豆腐と梅の葉
あひのく海側 里坊り見
菱川う跡を走る波がけりん
風氣のまじ徳無きの者あれ
名をわざひゆくとまく 楠シモセ
もよとくとく身をのれぬ
神のとよ處をとまぬと諦め
所より下 東本居 千旦

表合説



皮子梅のやせ

